

<英語>

## 英語の語彙力を高める学習指導の工夫 — イメージで広げる言葉の世界 —

県立浦添商業高等学校教諭 前 新 令 子

### I テーマ設定の理由

平成11年度に出された新学習指導要領において、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成と、情報や相手の意向などを理解したり、自分の考えなどを表現したりする実践的コミュニケーション能力の養成が目標として掲げられた。その背景には、これまでの日本の英語教育が文法や訳読指導に偏り、知識があっても十分に運用できないという点に対する反省がある。

実践的コミュニケーション能力を養うには、生徒が実際に情報の送り手や受け手となってコミュニケーションを行う活動が必要であるとされている。実際に情報のやり取りをするための基礎的な能力となるのが語彙であり、その語彙の意味的・文化的・音韻的背景を理解することが実りあるコミュニケーションにつながるのではないだろうか。

コミュニケーションとは人との関わりを通じて、自己の持つイメージを相手に伝え、また相手が伝えようとするイメージを解釈し理解しようとすることである。その媒体となっている語彙が、コミュニケーションを円滑に行う上で重要な役割を果たしていることは言うまでもない。

しかし、実際、生徒のほとんどが語彙学習の難しさを英語嫌いの原因の一つに挙げていると同時に、英語を理解する上で大切な要素と考えている。難しいと感じている語彙が英語学習の中で最も重要なものだと思っているのだから、英語学習に対して嫌悪感を抱くのも無理もない。

これまでの語彙指導を見直し、生徒が英語を日本語に置き換えるといった活動に重点を置くのではなく、言葉を直接イメージとして理解させるにはどうしたら良いかを考察していきたい。

<研究仮説>

ことばをイメージとして捉えさせることによって、生徒は語彙力を高め、英語をもっと多角的に見ることができ、身近なものとして感じられるようになるだろう。

### II 研修内容

#### I 第2言語習得における語彙習得の重要性

英語教育においてコミュニケーションを重視するようになってから、語彙の再評価が高まっている。コミュニケーションがどの程度目標を達成できるかは、どの程度語彙を使用できるかにかかっていると、言われる。鈴木(1999)は、自分が言いたいことに必要な単語を知っていれば、文法や発音などが少しくらい間違っても、自分の思いや考えは、具体的な場面さえあれば通じると、語彙習得の重要性を述べている。また、Krashenの指摘にあるように、外国語学習者は文法書ではなく、辞書を持ち歩くものである。Lupescu & Day(1995)は語彙知識がいかにリーディングにおいて重要であるか、また、語彙力が語学力一般と強い関わりがあることを指摘している。

#### 2 語彙・語彙力

##### (1) 語彙

語彙(Vocabulary)とは、一つの言語を構成する単語の集まり、あるいは特定の地域、人、分野に属する単語の集まりのことである。語彙を構成する自立した最小単位を単語又は語と呼ぶ。単語が外形に基づいた単位であるのに対し、語彙は意味で区切った単位である。語よりも小さな「接辞」と呼ばれるものから数語からなるイディオムや決まり文句まで含むものとされる。

##### (2) 語彙力

$$\text{語彙力} = \text{語彙量} \times \text{語文法力} \times \text{語用能力}$$

と、馬本勉(1996)が公式を示している。語彙力とは単に英単語を日本語に置き換えられるだけではなく、実際の場に即して運用できる能力であると考えられる。

##### ① 語彙量

語彙量とは、単なる単語の数ではなく、単語の外形と意味を積算したものとされる。例えば、green という単語について考えてみよう。外形としては一つの単語にすぎないが、使用される状況によって次の例のように意味領域が広がる。

Stop at the green light.

(青信号で止まれ。)

The bananas are still green.

(バナナはまだ熟していない。)

There are a bunch of green recruits.

(たくさんの新入社員がいる。)

Mr. Miyagi looks a bit green this morning.

(宮城さんは今朝は少し顔色が悪いね。)

The meeting is on the green issue.

(会議は環境問題についてです。)

Mr. Kamimura has a green thumb.

(神村さんは園芸の才能がある。)

など、状況に応じて表現する幅が広がっていることがわかるだろう。ただ、色の「緑」としてだけの捉え方と、上記のような場面にに応じて様々な意味に対応できる捉え方を比べてみると、外形では一つの単語でも語彙量にすると大きな違いが生まれる。新学習指導要領では語数が制限されているが、意味を増やすことにより語彙量を増やすことが可能である。むしろ限られた語彙数でも受信と発信の両面から検討して、受信用語彙と発信用語彙の指導や運用をもっと工夫することが求められている。

## ② 語文法力

高梨庸雄(2000)は、単語の導入はただ意味を教えることではなく、単語一つ一つがいわば生き物のように行動し、結びついたり修飾したりする文法との関連で教えることであると述べている。文法と語彙というのは、それぞれに独立して存在する概念として捉えられてきたが、語を文章の中で英語のルールにしたがって適切に使用することのできる力が語文法力である。コロケーション、語形変化、派生語の使い分けの能力が必要とされる。

(例) 濃いコーヒー・・・ strong coffee

濃いスープ・・・ thick soup

軽い食事・・・ light meal

軽い風邪・・・ slight cold

上の例はコロケーションの例だが、日本語では同じ濃い・軽いでも、修飾する語によって使い方が変化する。

## ③ 語用能力

相手の意図するものを状況に応じて聞き取る力や、的確に自分の意図を伝えるための能力である。言葉そのものの持つ語感を養い、幅広く様々な視点から言葉を柔軟に把握する能力をつけることによって、状況理解や話者・筆者のものの見方・感じ方がイメージとして広がってくる。前例(1)の語彙量の例として取り上げたgreenについて考えてみると、根底に緑=新緑・若葉・若々しいとつなげることができれば、後はその状況に応じて意味を広げていけるだろう。

その場・状況に応じた身体の動きを含めてコンテキストを捉え、固有の場における固有の意味についての検討を加える言語外の要素をも含むものと捉えている。breakという語について例を見てみる。

ア Eiko was out till two last night.

She's breaking my heart.

break が心をこわすから心配させるという意味につながる。

イ Can you break a twenty?

Sorry, I've only got hundreds.

20ドル札をこまかくできないか、という意味でbreakが使われている。実際に札を破いてくれと言っているのではない。

ウ This computer is breaking down.

I said ABC is pretty much a piece of junk.

コンピュータそのものではなく、機能が壊れてうまく作動しない、故障したという意味で使われている。

エ Well, that's my cue. Here I go.

Break a leg, Sean.

役者やこれから何か動作をとまなうことをする人に向かって"Good luck!"の意味で使われるようだ。脚を折ってこいと言っているのではなく、言外に、脚を折るほど悪いことなんて起きないよ！がんばって来いという意味で使われる。

以上の例からいかに語感を養いイメージを育てることが大切であるか理解できるだろう。

## 3 語彙の習得とその障壁

### (1) 語彙の習得

ある語彙が習得されているという時、頭の中に語彙の何がどのように習得されているのか。内在化されているのか。McCarthy & ODeilは、語彙学習は語の意味を覚えることではなく、文法的なつながりや、音声的な特徴を含めて学ばなければならないと述べている。つまり、先に示した語彙量・語文法力・語用能力の習得に、音声的な面が加わってはじめて語彙の習得がなされたといえよう。

では語彙力が語学能力一般ではどのような位置を占めるかということ、羽鳥博愛(1982)が次のような公式を示している。

$$\text{英語力} = \{ (\text{文法力} \times \text{語彙力}) + \alpha \} \times \text{スピード}$$

文法力とは有限の規則を用いて無限の正しい文を作り上げる能力で、語彙力とはある概念を単語に表し、単語を読んだり聞いたりして意味を理解する能力である。 $\alpha$ とは文才、常識、経験などで、文法力と語彙力があっても文才がなければまともな表現はできないし、常識や経験が無ければ理解力も落ちるといわれる。仮にそれらがあったとしても状況に即

座に反応して何かを言ったり、談話の中ですばやく対応できなければこれまた言葉を知っていることにはならない。つまり、広く社会・文化的な知識が必要なのである。

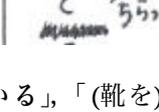
## (2) 語彙得の難しさ

### ① 意味的側面

荒木博之(1994)によれば、言語とは私たちの前に存在する対象世界を切り取るものである。その言語の違いは、対象世界の切り取り方の違いであると述べている。文化、習慣や環境の中で言葉は生まれ、成長するものであるから、まったく文化の異なる言語同士の間での置き換えは、厳密には不可能とされる。

例えば、日本語での「見る」と言う語は英語では以下のようにいろいろと表現の仕方が変わる。

表 1

見る	例文 (ハリー・ポッターから)	イメージ
see	Dursley didn't realize what he had seen,	
look	then he jerked his head around to look again.	
stare	Dursley blinked and stared at the cat.	
watch	As Mr. Dursley drove around the corner and up the road, he watched the cat in his mirror.	
gaze	They pointed out and gazed open-mouthed as owl sped away overhead.	
eye	He eyed them angrily as he passed.	
spot	The first thing he saw was the tabby cat he had spotted that morning.	
peer	Mr. Dursley crept to the window and peered down into the front gate.	
glance	She threw a sharp sideways glance at...	

逆に、日本語における「(服を)着ている」、「(靴を)はいている」、「(帽子を)かぶっている」、「(めがねを)かけている」、「(指輪を)はめている」、「(化粧を)している」、「(香水を)つけている」、などすべてwearの1

語で表す。

### ② 音声的側面

私達日本人が、語学学習で最も苦手とするものが音声面ではないだろうか。日本語は単調で音の種類も少なく、アクセントにも厳密な規則がない。Thの発音やR/Lの発音などが日本語にない音の代表的なものに挙げられる。また、日本語が表音文字であるのに対し、表記文字である英語は音と文字のつながりが見えにくいので学習が困難であると感じる。

## 4 学習者に必要な語彙数

### (1) 新学習指導要領における取り扱い

実践的コミュニケーション能力の育成が基本方針となり、言語操作から言語内容そのものの重要性が指摘されているように思われる。単語数も中学校では基本語の100語を含めて3年間で900語程度、それを踏まえて高等学校では、英語Iにおいて新語を400語まで、英語IIにおいては500語までとし、その範囲がオーラルコミュニケーションI、オーラルコミュニケーションIIに適用される。また、リーディングでは、英語Iに900語程度を加えた量とされている。ライティングにおいては、英語Iの範囲内の語彙で対応するようになっている。

新学習指導要領では単語数が制限され、その限られた単語をどのようにうまく習得できるかが語学力を伸ばす鍵となっている。つまり、学習者が基本語彙の意味の可能性を能率的に理解し、必要なときに取り出せるように示すことが重要である。そのためには、教師側が個々の単語の世界をどのように見ているかが鍵となり、教師側の効果的な語彙指導がより重要性を帯びてくる。

### (2) 映画における単語数と基本語の重要性

映画「You've Got Mail」を一般的なアメリカ英語として取り上げた。

**総語数 11,967語**

総語数から人名・地名を除いた語数に、中学校の新学習指導要領に定められた必修語100語が占める割合は50.46%である。又、現行の中学校学習指導要領で指定されている必修語507語では

73.4%、それにカタカナ語や一般的になじみのあるCatsやDogを含めると約80%以上の英単語を中学校段階で習得していることになるのである。

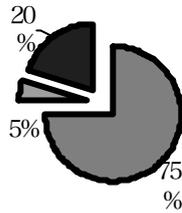
話し言葉の方が、書き言葉よりも使用される語が



易しいものが多かった。非言語的情報が一緒に伝わるという効用だろう。

表2(品詞別頻度表)

動詞	名詞	形容詞
be (863)	store (24)	all (51)
go (105)	time (18)	right (30)
know (105)	people (17)	good (29)
have (78)	night (16)	new (17)
get (72)	man (16)	great (16)
say (67)	name (15)	some (14)
think (54)	business (15)	fine (13)
do (46)	corner (15)	little (13)
want (35)	shop (13)	much (13)
see (30)	children (12)	happy (13)

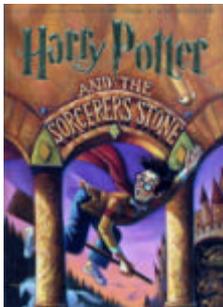


You've Got Mail  
総語数 17, 757

### (3) 児童文学書における語彙数と基本語の重要性

児童文学書「Harry Potter」の第1章を取り上げた。

現在最もよく読まれている英国の児童文学書である。



総語数 4,706語

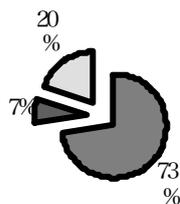
総語数から人名・地名を省いた語数に、中学校の新学習指導要領が定める必修100語が占める割合は、約50%、現行の507語に照らし合わせると、約73%になる。更に、カタカナ語としてよ

く知られる語をあわせると全体の80%もの単語を理解していることになる。

次に使用された頻度の高い語を頻度別に示す。

表3(品詞別頻度表)

動詞	名詞	形容詞
be (197)	professor (30)	little (9)
say (49)	people (22)	much (8)
have (25)	cat (22)	next (8)
go (20)	street (15)	only (6)
know (20)	something (12)	few (5)
see (20)	owl (12)	any (5)
think (19)	man (9)	large (5)
get (14)	number (8)	most (5)
look (12)	boy (8)	tabby (5)
come (8)	son (8)	such (4)



Harry Potter  
総語数 4,461

### (4) 語彙に関するデータの考察

実際にデータを見ていくと、日常の生活に使われている語彙は私達が初期の段階で学習しているものばかりである。語彙の持つ本来のイメージを機能的に結びつけることで内容の理解が深まり、未習語についても推測力がつくと考える。また、話し言葉においては語と語の音の結びつきが強く、聞き取りに

くいと感じる面が多い。例えばbe動詞は主語やnotとの結びつきが強い。

カタカナ語からイメージとして結びつけられる語が全体の7~8%というのは、おもしろい発見だった。又、実際に映画や洋書で使用されている表現に触れることによって、英語学習が単なる受験勉強だという感覚はなくなるのではないかと考える。

### 5 イメージにつなげる語彙学習

言葉は身の周りのもの、経験した出来事などを語る手段である。言葉で言葉を理解するよりもその経験したものと直接イメージで結び付けられるほうが、言葉のあらゆる意味を明確に理解できる。また、記憶にとどめる上で有効である。羽鳥博愛(1982)は右脳思考の観点から、英語教育におけるイメージ作りの重要性を述べている。更にリーディングやリスニングにおいても、文章の流れに沿って言葉の上での論理的イメージに加えて情景的イメージを持つことが大切であると述べている。語彙のイメージを持つことによって、主題を捉えたり、未知語の推測が容易に行えるようになると思う。

イメージを効果的に喚起し、言葉と補強しあいながら読みを深める学習指導方法を以下に示す。

#### (1) 視覚教材の利用

##### ① 絵・写真・図表など

同一の絵を様々な観点から眺めることができることに有用性があり、生徒の興味を喚起し、且つ場面を与えることができる(Lee, 1972)。CorderやKreidler(1971)は、絵は意味を理解する際に起こる問題を解決するものであり、概念そのものや概念と言語との結びつきの理解を容易にすると述べている。

##### ② 映画・ビデオなど

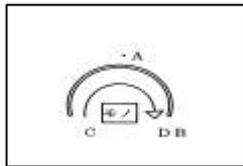
阿部一(1990)は、英語をモノにするためにはまず最初に、できるだけ手を加えない、意味のある英語を耳にしたり、目にしたりすることが大切で、その過程があつてはじめて実践英語コミュニケーション能力への習得につながると述べている。映画には、音声・抑揚・間の取り方といった音声面だけではなく、顔の表情や身振りといったノンバーバルな側面が含まれている。実際非言語情報が伝達における役割の70%以上を占めるというデータから、非言語情報の正確な読み取りも語彙からイメージにつなげる力となるのは言うまでもない。

また、映画には音と映像が相伴っているため、「自然さ」があり、外国語教育にとって極めて有効な手段であると、メディアとして外国語教育への貢献の高さが期待されている。

ビデオを利用して教科書の例が現実に使われる場面に触れさせることによって、生徒の理解を促進すると同時に生きた英語を教室の中へ持ち込み、異文化の擬似体験が可能になる。

(2) コアとプロトタイプ

コアとは、語の持つ中核的な意味部分を指し、プロトタイプとは中核から派生される特殊な指示内容と解釈する。基本的な意味から発展した意味につなげる柔軟性・創造性も大切な要素である。例として以下にoverのコアを示す。



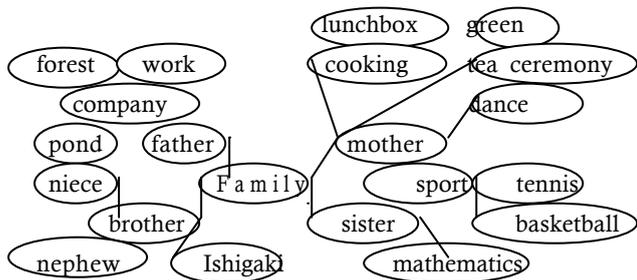
- A: あるものから離れた上部  
The plane flew over the city.
- B: 全体を覆う・包む  
Mr. Murayoshi wore a large jacket over his sweater.
- C: あるものを越える  
Don't jump over the fence.
- D: あるものを越えた所に  
The Okinawa Education Center is over the hill.

図 1

(3) Semantic Map の活用

語彙は関連づけて覚えることにより、記憶にとどまりやすい。個人の想像性をいかし意味の関連を行うことで語彙の幅を広げていくことが可能である。

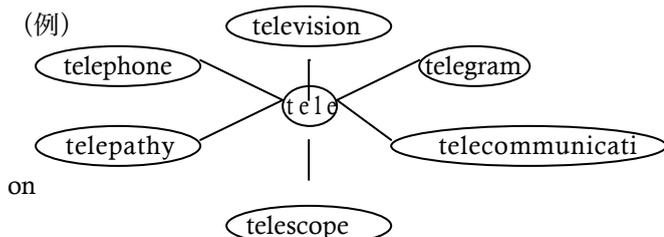
(例)



(4) 接辞の活用

接頭辞や接尾辞を学習することも語彙の理解につながると思う。どんな種類の英文でも10%から20%の割合で接頭辞や接尾辞の付いている語が使われていると言われる。総異語数に占める割合は50%近くにもなる。接頭辞や接尾辞・語幹を学習することが語彙の意味推測につながることは言うまでもなく、また、新出学習語彙においても意味のつなぎ合わせから、習得も容易になるであろう。

(例)



(5) 文脈

単語の意味は文脈によって決定されるものだ、と

羽鳥は述べている。また、単語を単一で示すよりも文の中で示した方が高い理解度が得られたという報告もある。新出語の導入を少なくとも文脈の中でインプットすることによってその単語と一緒に使われる要素も一緒にインプットされる。それによって同じような文脈で単語が使われたときに、連想しやすくなる。文脈の先行情報から意味の限定が可能になり、イメージが広がりやすくなると考える。

(6) 外来語の活用

現代社会には多くの外来語が存在し、カタカナ英語として日々の生活の中にある。現在増え続けるカタカナ語はほとんどが英語からの語彙であり、カタカナ語を活用することによって英語の語彙習得の手助けとできないか。

コンピュータの普及に伴い多くのカタカナ語が使用されている。アクセス、インターネット、ネットワーク、ツール、クリックなどの一例があげられる。使用者は日本語には訳せなくても、そのことばを概念として理解している。そのカタカナ語が英語の音や文字と結びついたときには、英語の概念と日本語の概念の橋渡しが容易に行われているようだ。川又(1998)の研究によると、生徒が新出語の中で未知語として認識しなかったものには、カタカナ語として良く知られた言葉が含まれていたという。

次の広告が新聞に掲載されていた。

「パーティーのスタートは県内ミュージシャンがそつと教えてくれたクリスマスソングから。ごちそうのオープンでこんがり焼いたチキンとまるごとりんごを包んだアップルパイがテーブルに並んでいます。お部屋のコーディネートもちろん手作り…」

文章の中にやたらカタカナ語が目立つようになったのはここ10年ほどのことである。時代の流れとともに外来語という特殊な存在であるはずのものが、極めて身近な存在になった。鈴木(1996)によると、私達の言葉の一部になった外来語には5種類の型が考えられるとしている。

- ① 追加型：日本文化の中に対応する事物や現象が存在せず、従ってそれを表す言葉も無いとき、外国から新たに導入された物や事柄に対して本国で呼ばれていた名をそのまま日本語化して取り入れる事。  
{チーズ・バター・アイデンティティー・コンピュータ}
- ② 併存：在来語と外来語が併存する形。両者の関係が相補的で、日本人の事物の把握の特徴を示す。  
{葡萄酒：ワイン 小刀：ナイフ：メス 戸：扉：ドア}
- ③ 置き換え：在来語が外来語に置き換えられた現象。  
{猿股：パンツ, グリーフ}
- ④ 翻訳語：翻訳語には原語を文字どおり直訳し

たものと、原語が表す事物や概念の持つ特徴を捉えて適切な漢字の組み合わせで表現したものがあ

自動車 auto (自ら, 自分で) + mobile (動ける・動く性質を持つ) …翻訳したもの
飛行機 飛んでいく機械 …対象の機能に注目したもの

⑤ 意味拡張：もともと日本語にあった言葉が外国語の影響を受けた結果、本来持っていた意味範囲を拡張することにより、新しい事態に対応する場合。その結果、再命名が起こる。

{和菓子：洋菓子 日本酒：洋酒 など}

言葉は日々の生活の中で変化していくものだ。実際の生活の中で触れ、使用することによってしか感じ取れない言葉の感覚というものがある。日本語に置き換えられない部分に、カタカナ語でしか感じ取れない点があるように、カタカナ語には鋭い感覚を刺激する要素があると考えられる。カタカナ語は言語教育においては常に悪者のように扱われるが、言葉に対しての興味を喚起し探究心を養い、英語に対して身近な感覚を与えてくれる。それが生徒の想像力を刺激し、言葉をイメージとして捉える手助けとなる。

### III 学習指導の工夫

#### 1 学習指導の工夫例

(1) Objectives of The Lesson:

- (a) To increase the students' vocabulary and expressions relating to the topic.
- (b) To make sure the students understand the basic vocabulary and its usage.
- (c) To compare how the Japanese way of thinking and English or American way of thinking appear on the expressions.
- (d) To give as many opportunities as possible to experience the situation relating to the topics.

(2) Procedure:

Procedure	Students' Activity	Remarks
Introduction (1 <sup>st</sup> period of the topic)	Create his/her own semantic map. Present his/her own to the class.	Tell the students that they can use either English or Katakana words. Select a few students' work and show them to the class using OHC. Check and expand the students' vocabulary.
Reinforcement (After the textbook material)	Watch the movie and try to understand the situation. Listen to the words used in the movie. Grasp the meaning and guess the feeling of the speaker in the movie.	Explain the story and the movie should be cued to the situation used the target phrase. Prepare the scene with target phrase or vocabulary and support the students to create their own image of new expressions.
Follow up (End of the topic)	Let the students imagine that they are in a similar situation and create their own story.	Support the students to create their own story.

#### 2 期待される効果

教科書の中で取り扱われている言葉や表現を自分のものにするためには、それらが実際どのように使用されているかを疑似体験する事は重要である。言葉を多角的に捉えることによってイメージが作りやすくなり、語彙の学習が促進されることが考えられる。

\* By using the visual aids, the image will be retained in the students' mind and they can use those images to reproduce the sentence when they encounter a similar situation.

### IV まとめと課題

これまで語彙の学習は、学習者に任せられる点が多かった。しかし、教師が語彙指導を工夫することによって英語に対する関心と理解が深まると考える。そのためには私達教師が語彙をどのように提示するかも一つの課題といえよう。語彙力を高め、イメージを広げることによってリーディングで読み取る力が豊富になり、またリスニングにおいては音から概念へとイメージが<主な参考文献>

大西泰斗/ポール・マクベイ 1999 『ネイティブスピーカーの単語力』 1 基本動詞 研究社出版

鈴木孝夫 1999 『日本人はなぜ英語ができないか』 岩波書店

鈴木孝夫 1996 『教養としての言語学』 岩波書店

つなげられれば、その場に合った聞き取りの力も増すだろう。更にライティングやスピーキングにおいても、自己の持つイメージを簡単な言葉で言い換え表現する力がつくことによって伝達能力が高まることが期待される。

語彙の指導は単調になりがちであるが、多くの視点から語彙を見直してみると新しい発見があって楽しいものだとわかった。現場では、その目的に合わせて活動を工夫していきたい。

田中茂範・川出才紀 1989 『動詞がわかれば意味がわかる』 The Japan Times